

稲沢市 学校図書館部会 研修会報告

稲沢市教育研究集会は、毎年、市内小中学校の図書館教育担当の教員が集まって開催しています。本年度は、小グループでの討議を中心に、各校の実践紹介や情報交換、テーマに沿った研究協議を行いました。以下の通り主な内容を報告します。

1 研究テーマ

「自ら本を手に取り、学びに生かすことができる児童生徒の育成」

－学びに役立つ図書館づくりを核にした授業実践を通して－

2 研究協議

(1) 前半の研究協議（各学校の実践報告・情報交換）

グループで各校が行った実践を報告し合い、その後、各校の図書館事情など情報交換を行った。

(2) 後半の研究協議（柱立てに沿った研究協議）

《授業の中で学校図書館をどのように効果的に利用していくか》

○ 学校図書館を活用した授業実践のできる教科・単元を担当が事前に把握し、それを司書補と連携・共有する。

○ タブレットのよさ（たくさんの情報を短い時間で集められる）、書籍のよさ（信憑性・まとまり）を子どもたちに知らせ、それを生かして調べ学習を行う。

○ 特別教室に、各教科の学習に関連した本を設置したり、教材と同じ作者の本を教室前のブックトラックに並べたりして身近に活用できる環境をつくる。

○ 本の分類番号について学習することが、子どもたちが自ら本を手に取り、学習に活用する力をつけることに繋がる。

《学びに役立つ学校図書館としてどのように整備・活用していくか》

○ 学習の成果物を図書館に掲示し、各学年の学習の様子を他学年の子どもたちに知らせる。

○ 学習漫画を置くことで学校図書館に足を運ぶ生徒を増やす。

○ 書籍の配置については、単元の学習ごとに使う本がまとまっていると学習で使いやすいし、子どもたちが意識して読むことができる。

○ どんな本があるかを検索できるような図書館システムを活用していくことが必要である。

3 指導助言

《稲沢市立中央図書館長 塚本ゆかり氏より》

○ 配本サービスや団体貸し出しの利用促進

○ 1か月の平均読書量は、市内の小学生も中学生も増えている。不読率は、中学生で高くなっている。

○ 学校図書館のデジタル化は、R7・R8で予算要求していく。

《愛知教育大学非常勤講師 安田 剛章 先生より》

○ 学校のどこに本があってもよい。（五感でとらえるすべてのことが情報であるとすれば、学校の至る所が図書館であるという発想）

○ キーワードは「実生活」地に足のついた学びが大切である。

○ 紙の本での十分な体験があるからこそ、紙と電子書籍を使い分ける力が育つ。

○ 授業で作上げた成果物を学校の財産として学校図書館で保管・活用したい。



部員からの意見として、「少人数に分かれて話をするのができたので、普段の悩みや困りごとなども共有できた」「まだまだ自分にもできることがあるなど励みになった」などの感想が寄せられ、学校図書館教育について情報共有ができました。